

会長の時間 ●富田会長

本日は、クリスマスと新しい年を目前にして、平和についての話をしたいと思います。

ロータリーの目的は4項目からなりますが、目的の第4に「奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。」とあります。4項目はどれも重要なものでありますが、RIとしてはこの4つ目の世界平和が究極の目的であると考えます。また、平和は、7つの重点分野のトップに挙げられています。

1983年、大島渚監督の「戦場のメリークリスマス」という映画がありました。カンヌ映画祭のグランプリは逃したものの、今年、逝去された坂本龍一が英国アカデミー賞作曲賞を受賞した他、日本アカデミー賞の作品賞と監督賞を受賞して、当時、話題になりました。この映画は、日本と連合国という敵国同士という不幸な関係にありながら、それを超えて人間としての友情を深めて行く男たちの物語と異文化の尊重がテーマでした。

1991年、ソ連の崩壊により鉄のカーテンと呼ばれた冷戦が終わり、アメリカが一強となったことで、局地的な紛争は残るものの、誰もが世界平和が訪れると思っていました。その後の世界の歴史はご存知の通りで、残念ながらロータリーが願う完全な世界平和が訪れたことはありません。平和への願いも空しく、2022年2月24日に始まったウクライナ侵攻は未だ終わらず、新たにイスラエルとハマスの戦闘も始まりました。それでも尚、ロータリーが、寛容の心を以て平和の為に活動することは有意義なことと考えます。

先月の日経新聞に「茶道で平和に 100歳の使命感」と題して裏千家前家元千玄室の記事がありました。千玄室は最高齢のロータリアンの一人であり、ロータリー日本財団の理事長を務められています。「一碗からピースフルネス」という理念を提唱され、国連でも、茶道を通じた平和と活動で活躍されている事は良く知られています。千玄室は太平洋戦争の特攻隊経験から平和に対して使命感がありました。それは「戦場のメリークリスマス」のテーマと同じく、千は「平和には異文化の尊重が欠かせない。茶道はそのきっかけづくりを提供できる。世界に通じる普遍的価値は平和であり、異文化の尊重である」と考え、また、「互いに敬い、譲り合うのが茶道の精神です。一碗の茶を前にすると人種も宗教も社会的格差もありません。平和づくりに茶道が果たせる役割は大きい」という考えから来る使命感でした。

また、敗戦後、日本の伝統的価値観が否定される論潮がありましたが、千は、伝統文化である茶道に世界平和に貢献する可能性があることに気づき、これを伝える為60ヶ国以上巡り、海外で「『丸い茶碗は地球です。その中にある緑のお茶は自然を象徴しています。』と語ると、『衝突する衝動』が和らぎ半歩下がって我慢できるようになる。」と唱え、「戦争を抑止する為、半歩下がって譲り合う場が大切であり、茶道が貢献できる余地は大きい」と語って来ました。この茶道の考えは、ロータリーの平和の考え方と類似している様に感じます。

当年度、マッキナリーRI会長の“CREATE HOPE IN THE WORLD”というテーマを今一度、噛みしめ、戦場に於いても心休まるクリスマスと希望のある新しい年が迎えられることを祈念して本年最後の会長の時間を終わります。ご清聴ありがとうございました。